

満州佐伯村遭難記

北山直之

(会員 佐伯市中の島一九二五)

基幹先遣隊へ

昭和十四年、兵隊検査を受けた。結果は丙種合格、軍人にはなれないわけだ。戦時中であり、軍人になれない人間なんか肩身が狭く居場所もないくらいだった。ちまたでは出征兵士を送る風景があちこちで見られたものだ。

この頃、日本政府は満州への農業移民百万戸計画というのを打ち出していた。佐伯地方でも分村計画が始まっていた。県南の明治村・上野村・切畑村・中野村・因尾村・直見村・川原木村七ヶ村ブロックで分村して、満州に佐伯村を建設しようというもので、この計画に長兄武雄・次兄光春が基幹先遣隊の一員に加入したのである。そして一足先に渡満した。村では引き続き補充先遣隊の募集を始めていた。折りも折り、兄武雄より「お前も満

州に來ないか」と誘いが來た。私にとって肩身の狭い思いで日々を過ごしているところで、渡りに船で参加に踏み切ったのである。直ちに玖珠郡森町の尾籠農民道場にて、しばらく厳しい訓練を受けた。三名だった。これが終わると村の有志と私たち三名が、兄たちの居る現地訓練所のある弥栄村に向け出発した。

まず朝鮮に渡り途中京城(現在ソウル)で下車、大分県人会の案内で朝鮮総督府へ。ここで大分県出身の南次郎大將に迎えられた。大將は私服姿でお出でになり、私たちに激励の言葉と恩賜のタバコを下さった。雲の上のような大將に直接お会いできて、感極まったものである。

再び車中の人となり、満州へゴトゴトと三日くらいかかったように思うが、ようやくにして目的地弥栄駅に着いた。もう夕暮れだった。駅には先遣隊員全員が迎えて出迎えた。見ると全員が鼻ひげをはやしているではないか。ちがった人を見るようだった。これにはびっくりした。こうして弥栄村に着いたわけだ。

建物は古い兵舎のようなものだった。寒さはかなり厳しかったが、家の中は暖房が効いていて暖かかった。久しぶりに兄に会いほっとしたと同時に、この荒涼たる原

野、寒々とした大地で、明日から何が始まるのか、不安も隠せなかった。

現地訓練所となっている弥栄村は、昭和七年第一次武装移民として入植以来、資材・食料などの不足、度重なる匪賊の襲撃等、数々の困難を乗り越え、開拓移民団としての基礎的建設を終わらせた村だった。したがって開拓村のモデルとして基幹移民訓練にふさわしい場所だった。ここで昭和十六年二月始めまで、現地のさまざまなもの勉強した。

・幹部

団長 矢野武吉

經理指導員 出納 研

農事指導員 金田 豊

・基幹先遣隊員

上野村 北山武雄・大矢三郎・矢野到・工藤光春

明治村 所賀勝・川野休造・児玉環

中野村 岡田誉喜・工藤弥助

因尾村 清田光之・柳井光・柳井利夫

直見村 飛川善作・岩畑要作・間重利・若林平太

郎・大友菊次郎

川原木村 三浦一・春山藤男・高畑藤太郎

上野村 (基幹隊員補充)

合計二十三名。(計画人員は二十一名)

現地入植

昭和十六年二月十一日紀元節の日、奉天省昌図県桜桃村の開拓村建設予定地に入植。一行は二月八日弥栄村を出発、ハルビンに一泊。ここで矢野団長ら幹部と合流、また山口村・最上村の人達といっしょになり、七十名ばかりになってハルビンを出発、十一日の朝昌図駅に着いた。駅には先発した出納さん、児玉さん、岩畑さん、県の開拓関係者が多数出迎えてくれた。

トラックには食料やふとん等を積み、児玉さん運転で一足先に出発した。宝力鎮に着いたのは夕暮れであった。ここで最上や山口の人達と別れた。道路の状況が悪く、大車から降りて水路に沿って目的地である郭牛園に向かって歩いた。郭牛園では現地の人達がオンドルに火を入れ、食事も用意して待っていてくれた。日はもうとつぷりと暮れていた。

二月十二日に全員集まり厳肅な入植式を行った。日章

旗が翻翻ひるがえる様は、いまま私の脳裏に焼き付いている。

現地に立つてまず驚いたことは広いことである。四方を見回しても山らしきものは一つもないのである。しかも目に入るのは見渡す限りの畑である。開墾する土地などはない。(水田を除いては)すべて原住民が先祖伝来耕してきた立派な畑である。このような大地を時の政府は買取り、原住民を地区外に出して私たちに用意したのである。私達にとつては誠によい条件であった。

建物はすべて原住民が使用していたもので、まず便所がない。ふるもない。電気・電話もないのである。

本部は郭牛圏の元屯長の家に置いた。粗末な建物だが、高さ二・五m余り、厚さは一mもある土塀が囲み、庭も広く、万一の場合籠城できる利点があった。このほかに五・六戸の家があった。団長ほか幹部の者が住み、私たちは他の家で生活することになった。

初期の開拓生活

一番急がれたのは電話の架設である。多くの人がこれに回ったが、私たちは夏に備えて天然の水を採取する事

とし、毎日川に行き厚さ一m近い氷を切り取り、持ち帰って地下壕を掘り、これに保存した。

三月には、補充先遣隊十八家族がやってきた。四月に入ると基幹先遣隊の人達が、内地に残してきた資産や負債の整理と、家族を迎えるため一時帰国した。四月十一日に老・幼・婦女子を含む大勢の人たちがやってきた。

村は一ぺんにぎやかになった。しかし、この人たちにとつて、目に入る現実に、打ちひしがれたのではないかと思う。出来ることならこのまま日本に帰りたいと、泣いた人も少なからずいたのでないだろうか。

私は野菜栽培の班長を命じられた。大平山(タイピンシャン)という集落の前に広い畑があつて、大根・ニンジン・ゴボウ・白菜・ネギ・南瓜・西瓜・マクワウリなど、ありとあらゆるものを栽培した。作業はすべて全部の主婦・娘さんなど、つまり女性群との協同作業だった。私は班長とはいっても、野菜の栽培に何の経験もなく全くの自信はなかつた。手探りで皆さんに教えられながら、何とか責任を果たすことが出来た。

この野菜だが、在来の品種はともかく、内地から持って来た野菜は、初めての土壌が良かったのか、虫も付か

ずすばらしい出来栄であった。出来た野菜は大きな穴を掘り、地下に貯蔵庫を作り冬に備えた。また白菜や大根は漬物に加工して、これも充分翌春まで団内全員の食卓を賄える量を確保することが出来た。

特筆すべきは、現地のマクワウリの美味しさだった。これは忘れることが出来ない。

稲作の方も、初年度から内地の奉仕隊が来るなどして、大変に良い結果が出たようである。

結婚

二十三歳の時、結婚した。相手は同じ団員の岡田喜・トクの長女八千代である。開拓団入植以来初めての結婚式であり、皆さんに祝福されたものである。間もなく子宝に恵まれ、二十四歳で父親となった。長男泰夫の出生である。また一年おいて次男貢が生まれた。お互い若かったが、建設途上でもあり、唯々毎日が子育てと農作業に追われる日々であった。

この頃戦況が思わしくなく、内地の方が大変なことになっていて、むしろ満州の方が安全と思えたくらいだった。現地は情報に乏しく、私たちには戦況を知るよしも

なかった。団の方はすべてが順調で、先行きなんとなく明るいものを感じていた。後で知ったことだが、十八年頃から戦勢は逆転していたという。

召集令状

昭和二十年三月、最後の入植者が日本を出発するとき、内地はあちこちで、激しい敵の空爆を受けていると聞かされた。

五月二十日、とうとう召集令状が来た。私を含む二十三名だった。私は牡丹江省の綏靖というところに入隊した。驚いたことに隊には武器や弾薬が一つもなかった。あつたのは木銃だけだった。私たちが一番信頼していた関東軍の精鋭は、武器ともども南方の戦場に送られ、ぬけの空だったのである。私たちを召集したのは単に数を揃えるだけであつた。隊にはわずかに教育用の兵がいて、それでも一ヶ月位は軍事教練を受けた。後はもう土方と同じで、毎日壕ばかり掘っていた。

ソ連軍進攻

八月十三日、突然ソ連軍が進攻してきた。我が方には

前日の十二日に歩兵にだけ小銃が届いた。相手は戦車を先頭に自動小銃を撃ってきた。十三日、十四日、十五日と三日間戦ったが、相当な戦死者が出たと思う。私たちは逃げるばかりだった。ようやくムーリンというところまで退却した。

八月十七日、私は他の四・五人と後方連絡に出された。東京城というところに武器・弾薬を届けるよう要請していたが、もう隊が退却するので武器を届ける要はない。と言う連絡だった。直ちに出発することになったが、ここで負傷兵三十名ばかりを同行することとなった。

牡丹江の辺に出て見ると、鉄橋が破壊されていて河を渡れない。私たち五人は一本の角材を見つけ、これに銃や持ち物をくくりつけて河に入り、無事対岸に渡った。後を振り向いて見ると一行の姿は見えなかった。流されたのであるが、今はただ無事を祈るのみ。銃声はあちこちで絶え間なく続いていた。

戦線を彷徨う

これから私の逃避行が始まるのである。万一を考え迂回路を通り湿地帯を歩いたり、山の中を歩いたり、当て

もなく歩き続けたものである。ある日、人の声がするのを見て見ると、目に入ったのは大勢の日本軍の捕虜だった。ソ連軍の兵と戦車・トラックに挟まれながら、延々と続いている。敗戦を知らない私たちは理解することが出来ず、ただ呆然と眺めるだけだった。しかし、何とかして道の向こうに出らねばならない。隊長の郷田さんは私よりかなり若いのが、現役兵で戦車について知識があり、戦車の中から近くは見えぬから、夜、戦車と戦車の間をすり抜けることが出来ると言う。その夜、隊長と私で決行し、難無く成功、一応安全な場所に移り、後続の三人を待ったが離れ離れとなり、これ以後、隊長と二人で行動することとなった。

次の日、二人はある集落に辿り着いた。すると銃を持った現地の若者七・八人が出てきて、持っていた銃も手投げ弾も取り上げられてしまった。彼らは村を守る自警団だった。丸腰になって集落を離れると、二人の男が銃を構えて付いて来る。この時ばかりはもう終わりかと思った。村外れまで行き、始末する気かと思つた。先手を打ってこつちでやるかと相談したが、結局運を天に任せようと言うことになった。ところが、この二人は我々

の命ではなく、持っていた衣類が欲しかったのである。大勢の人前では自分のものと成らぬから、此のような行動を取ったものと思う。

このあと二人で満州パルプの伐採地らしいところにとどり着いた。要所要所に家があり、道には用材を搬出するのに使用したレールが延々と続いていた。人はいなかったが、豚や鶏やその他の家畜が追いつ放しのままだった。此の道を奥へ奥へと上がって行くと、一段と大きな集落があった。朝鮮人が一人いて、別に警戒するでもなく、むしろ快く迎えてくれた。この人の話では、ここは朝鮮人が主体で、木材の搬出をしていたが、戦争が終わって皆帰国したという。ここには米こそなかったが、コウリヤン・粟・大豆・塩・油などたくさん残されていた。また、この風景はまるで故郷の山間の谷間にいるようで、気持ちが良いがした。体もかなり疲れているので、しばらく休養することとし、久しぶりに豚肉・鶏肉・野菜などの料理に、この上ない贅沢をさせてもらった。

二、三日すると突然一ヶ中隊くらいの兵隊が、山から出てきた。此の隊の隊長から「日本は負けた。君たちも

行く宛があれば一先ずそこに落ち着き、再起を期してくれ」と言われ、始めて終戦を知り、それを信じたのである。此の隊は食糧を調べ再び山に入る由、同行を勧められたが、体調を壊していたので辞退した。
(つづく)

